

## 特集

# ファイルベース化促進の ミドルウェア 提案

## 注目3社の提案を聞く

ソニー株式会社	メディアバックボーン	Media Backbone
日本ヒューレット・パッカード株式会社	メディア・ワークフロー・マスター	Media Workflow Master
日本アイ・ビー・エム株式会社	メディア・エンタープライズ・フレームワーク	Media Enterprise Framework

テープによるリニアからファイル・ノンリニア——映像メディアのインフラフォーマットの地殻が変動している。これまで放送機材が先進的な技術を実現し、その後を追うようにして民生機材に波及するのが法則だったが、ファイル化では民生用ビデオカメラで脱テープ化、HDDや半導体メモリ録画が採用され、放送機材はテープがまだ大活躍しているという逆転現象も生まれている。

4月、米ラスベガスで開催されたNAB(全米放送業大会)ではファイルベース提案の中核を成す「ミドルウェア」のコンセプトが充実してきた。そこで、ソニー「メディアバックボーン」、日本HP「メディア・ワークフロー・マスター」、日本IBM「メディア・エンタープライズ・フレームワーク」について担当者に聞いた。

(レポート:吉井 勇・本誌編集長)

### 大胆仮説

#### ——生放送も含めてアーカイブ

本誌別冊『The FileBase Book』——昨年6月10日発行から1年が過ぎた。この間、どういった進展があったのか。それを考える上で『The FileBase Book』に込められたファイルベース化の基本を改めて振り返ってみよう。

「ファイルベース化には、『メタデータ オリエンティッド アーキテクチャー』とメタデータというすべてを貫く情報の太い幹線を基本とするワークフローの概念が成されなければならない」(1章p25)。

また、アーカイブについて「全システムをそのまま見立ててはどうか」という大胆な発想転換を提起している。

「従来のアーカイブについての発想は、使用したものの二次利用に主眼が置かれていた。これは倉庫的な発想である」として、次のように呼びかける。

「一歩進めて、各所に分散配置されたサーバに蓄積されたものでも有効活用してファイルベース化のメリットを生かす。これは物流センター的な発想である。さらにもう一歩進めて、放送システム内の生放送も含めてアーカイブとを考えてみてはいかがだろうか」(同章p25)。

ファイルベース化の考えを、制作システムのファイル化による効率アップという表面的なメリットだけで捉えることより、放送局の業務全体の革新が見えてくる。今回取材した3社提案のミドルウェアはともに、バックオフィスの管理系と SOA による連携を示唆している。もち

ろん、これまでの視聴率だけでなく、SNS やブログなどの表現された意見やトレンドといった視聴動向の分析による番組企画力の向上も鍵を握る。要するに、これまでバラバラでサイロ化されていた業務ラインの統合が意識されるという。

では、それらは何を目指すか。アナログ放送のビジネスモデルは広告無料の単線型であった。それがデジタル放送時代では、多様なデバイスに向け、多彩なメディア展開が発想され、そのビジネスモデルへの瞬時の対応がポイントとなる。この対応力こそ効率化と考えたい。コストと確実性、そして何よりもシステム変更性を容易に実現するのがファイルベース化なのである。まさに経済的に厳しいときにこそ次へ飛躍するコンセプトである。

